

◆特集◆

森と地域が元気になる

木の駅プロジェクト

特定非営利活動法人 地域再生機構 理事 森 大顕

こんにちは。岐阜からまいりました、地域再生機構というところの理事をしております森と申します。さきほどの加子母、私も実は地域づくりというところで、山村のほうに出掛けて行っているな所でやってきました。一つここでいう所で活動してきましたが、今日お話しするのは大垣です。「加子母すごいな」と思っています。

今回お話しするのは「木の駅プロジェクト」というものです。一番初めは岐阜県の恵那市という所で始まった取り組みなのですが、そこからいろんな人に、いろんな地域の方にご要望をいただいて、今は大体全国に六十方所ぐらい木の駅と名の付くものがあるというのを聞いております。なかなか加子母のように大きな地域全体で取り組むというようなことはできませんが、山村側でも何とかやっぱり地域自立していかなくちゃいけないので、小さい芽なのかもしれないですが、お話を聞いてい

ただければと思っております。

まず地域再生機構という団体でわれわれ活動しているんですが、地域再生機構は実は小水力発電とか、今回お話しする木質、木を燃やしてエネルギーを取り出すような事業のお手伝いというかご支援というのを、地域の方と一緒にやっております。なので地域再生なのにエネルギーのことを君たちはやっているんだって、地元の方に言われます。そのときにいつもお話しをするのが、このグラフです。これ実は今日お話しする岐阜県大垣市という所の、今から二〇年後、二〇三五年までの人口のグラフになります。これを見ていただくと、大体今六〇〇〇人ちょっと切るぐらいの人口があるんですけども、それが二〇年後には大体半分ぐらいいなくなっていきます。最近では消滅自治体なるような言葉があり、大体日本全体で見ると、実は二週間に一つ、集落がなくなっているという状況です。多分この流れってのははずつ

と続いていくんじゃないかなというふうに思います。(図1)

今、地域で起きていること

2週間に1つの集落がなくなっています。

今後、地域の人口は→減少・高齢化

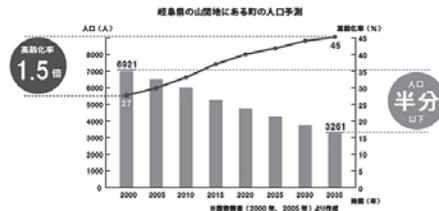


図1 岐阜のある町の人口減少のグラフ

こう見えて私は実は三三二なんですけど、われわれ世代からすると、都会で暮らしていくっていうことが必ずしもベストな回答ではなくなくなってきたと思います。最近よく炎上することでも有名な、われわれよりちょっと下のブロガーが居まして、彼が高知に移住しまして、「まだ東京で消耗してるの？」っていうふうなブログで書いてまた炎上してましたけど、でも彼も言うように、都会で過ごすということが、われわれ世代からしたら本当にベストかどうか分からないと思うんです。昨日も実は埼玉の

人たちと一緒に話をしていたんですが、彼らは、若い人も今農業をしていまして、彼らが東京に居たとき、震災が起き本当に瞬間にコンビニから物がなくなつて、食べ物も水もお金は持っているんだけど、でも全然買えない。地元に戻ってくればその人は農業やつてるんで、野菜も買えるし水もあるので大丈夫ですが。だから、本当に安心して暮らせるっていう所が都会ではなくて、実は田舎じゃないかなという思いがあります。そのときに本当に続くか続かないか、よく分からない状況になってしまった。それはとても悲しいことだなと思ひ、活動しています。

他方で、実はなんでそんなことが起きたのか、僕ら勝手に分析をしました。山であれば昔は、山からまきを取ってきてまきを地域で回して、また灰はなんか農業とかに回して、こうやってぐるぐるぐるぐる回すというような仕組みでした。これが多分東京オリンピックぐらいからだと思っただけで、便利な燃料が入ってきて、その代わりお金が出ていって人も出ていくようになっていっているんじゃないかと思ひます。

これ何とかならないかな。高野先生のところの卒業生で、私の先輩のような存在の井筒さんという方が卒業論文で検討されたんですが、人

口一四〇〇人の村が愛知県の豊根村という所にございます。このときにエネルギーで地域の中で支出している金額っていうのは全部合わせると幾らになるのか、検討されています。いつもこれクイズにして出しますが、クイズしてみましようか。ESDをやっている方なので、多分百発百中絶対当たるんじゃないかなと思ひます。一番は五〇〇〇万で、二番が一億円、三番が五億円、四番が一〇億円というふうになっておりますが。じゃあ五番で一〇〇億円というのを付けようかな。よろしいですか。心の準備はいいでしょうか。大体これで地域の中へ出掛けて行くと、強気の地域なのか弱気な地域なのか答えによって分かってしまうというのがあります。よろしいですかね。じゃあ手を挙げてください。当たっても何も賞金がないので。外れても何も罰ゲームもない。

一番、五〇〇〇万だと思ひ方。二番、一億円だと思ひ方。三番、五億円だと思ひ方。意外に割れるんですね。四番、一〇億円だと思ひ方。あんまり強気な人は居ない。名古屋っていうのは割と強気なかと。これは実は答えは三番の五億円らしいんですよ。当たった方おめでとうございませう。これ結構高額ですよ。これ初めて井筒さんの論文を見たとき

きにとてもびっくりしまして、こんな多いんかと思ひます。僕の頭の中でそのとき起きた妄想は、五億円の仕事で五〇〇万の仕事を一〇〇個できるんじゃないかというものです。そうすると、一四〇〇人の村で一〇〇家庭が新たに暮らせる可能性があるというふうに思ひました。父ちゃん、母ちゃん、息子、娘という四大家族が増えたとすると、全員で一四〇〇人の村にさらに四〇〇人、一八〇〇人実は住めるんじゃないかなというふうに思ひました。なのでエネルギーというのは地域の中で知らない間に外に出ているんですけど、それを取り除けば、やっぱりすごく大きな、地域にとつての効果があらんんじゃないかなと思ひて、エネルギーのことを地域再生機構としてはやっております。(図2)

木の駅について少しここからご説明します。木の駅は多分そういうふうな地域のエネルギーを使った再生の中で、大事なところがすごく詰まっている事業だと思ひています。いろんな所で実は取り組まれるようになって、三〇ヶ所って書いてますが六〇ヶ所ぐらいの所が地域で取り組みをしています。もともとは土佐の森・救援隊というところの高知の人たちが、自伐林業ということで自分たちで木を切る林業を振興してい

息子や孫がこの地域でやりがいのある仕事をして、幸せに誇りを持って住み続けられる地域の再生へ！

ました。土佐の森方式ということで始めたやり方を、丹羽さんて私のお師匠みたいな人がどこでもできるような形ができないかと思って標準化したのが、木の駅の始まりだと聞いております。それを初めてやったのは、岐阜県の伊那市の中野方という所でした。

地元の方が山に入って木を持ってこられて、木を置いて地域通貨でお支払いするという仕組みです。軽トラ一杯分で、大体二〇〇〇円から三〇〇〇円ぐらいの地域通貨がもらえます。大体それは「モリ券」とかいうような名前になっております。それを見た人たちがこれはいいいという所で飛び火します。丹羽さんが



図2 地域からお金と人が流出している原因

恵那のことをやっているときは農水省の役人だったんですが、辞めまして単身赴任で鳥取に行って技術を移転したわけですね。これすごいですよ。この地域でこんなに軽トラ並んだことって多分ないと思うんですけど。オープニングのとき、今日から始めるぞっていったら、みんな集まってやろうじゃないかとなったそうです。これを見せられると、他の地域でやるときになぜか競争心に火が付くみたいにして、長い行列が続きます。高野先生も関わられている豊田市の旭町という所でやったときは、列としては同じぐらい並びましたが、ちょっとカーブがないと見栄えがあまりよくないです。

今日お話をする上石津、ちょっと短いんですけどちゃんと行列ができています。その後も実はずっと行列がいろんな所でできていきました。ただ行列があるほうがいいかどうかはあまり重要ではなく、住民の方の本当に主体的な取り組みが重要になります。地域の方が実行委員会を作って、実行委員会の中で、じゃあどういう形でこの地域でやればいいいんだらうかということ話し合っ、地域の中で動きを起こしていくんですが、別に何から始めてもいいとわわれは思っています。五人ぐらいから始めて、そういう所が、智頭は

五〇人ぐらいですが、智頭と大体同じぐらい木を出したりするんですよ。だから、どっちがいいのかわからないわけじゃなくて、小さくてだんだんと広がっていくようなほうが多分いいんじゃないかなと思っております。(写真1)

どんな仕組みなのかというと、この山でも、自分の山でも他の所でも、ここを切らせてくれよと頼んで切らせてもらった山でもいいんです。あとは切り捨てられている木だったりとかを皆さん軽トラで持ってこられる。検尺で大体長さとか末口を測ると、どのぐらいの体積があるのかわかりますので、それを測って出荷します。出荷する所に線が引いてあるんですよね。立札が掛かっている



写真1 軽トラの行列 智頭町木の宿場プロジェクトの様子



写真2 木の駅ボックスに伝票を出す出荷者

ジャーって一〇〇円ショップで買えますし、地域通貨の印刷だって別に大したことはなくて、ただ紙切れになんかプリントするだけのもので、普通に事務局のおばちゃんの家プリンターでお金が刷られていたりします。あとは、この三二〇〇トンでは、逆ザヤとわれわれは呼んでいるんですけど、マイナスが出てしまう。ただ、三〇万で書いてありますけど、三人の人が一〇万円ずつ出し合うぐらいい本気でやるんだという地域であれば、多分どこでもこの仕組みは立ち上がるんじゃないかなと思っておられます。そういう覚悟が実はすごく大事かなと。何としてもやるという覚悟が大事かなと。あとは実行委員会とか、あとは結構気持ちとか地域



写真3 実行委員会の様子

を愛する心とかがあってというのが実は大事だったりします。(写真3)

いろんなものが生まれてきています。今までお父さんたちと一緒に植えた山がほったらかしになっているのは申し訳ないというので、あんまり見ないようになろうとしてきたのですが、やっぱりもう一回見るようなことになって。転がっている木が「あれは一〇〇円だ」とかお金に見え始めたりします。あとは山の仲間づくりが始まります。プロだったら一人で山に入るんですけど、そうじゃなくいろいろな人、地域の友達とか同級生とかが、もう一回入ろうじゃないかということになってきています。

あとは当然山もきれいになります

し、商店もなかなか元気になります。商店はまだまだこれからだっていうところはあるんですけど、それでもやっぱり昔来てたお客さんが来るっていうのがとてもうれしい、ということを聞いたことがあります。あとは実行委員会の中で自分たちで何でも決めていきます。お金の単位も勝手に決めていまして、一〇〇〇円なんですけど、別に五〇〇円という所が最近出てきたりとか、そんな風にお金も名前も自分たちで決めます。決めるっていう行為は、多分その地域の中でもあまりないですし、もう一回自分たちでやれるんじゃないかなと気付いてもらえるっていうのが、多分木の駅が一番大きな成果なんじゃないかなと思います。

林業と比較するとプロが市場に出すのって結構大変なんです。出したは出したでいいんだけど、一カ月後ぐらいに伝票が来ますが、実はこんなに少ないのかみたいな感じで額が少なかったりとかします。あんなだけやったのに。それでみんなやる気がなくなっちゃうんですけど。木の駅だとやっぱり片手間でいつでもできるし、もうけにはならなくても小遣いや晩酌代ぐらいになるということ、みんなやる気になってもらっているのかなと思っております。

いろいろ極意があるんですが、皆

さん名古屋の方ですよね。中学校区を超えないような範囲で点検します。あとは検尺をするんですけど、事務局がわざわざ本当にあるのになって調べたりとかしません。その地域に住んでいる人たちの信頼に任せて、わざわざチェックしてやるとすごく手間掛かっちゃうので、そんなことやってられません。あとは実行委員会の中できちんと議論を尽くしたりとか。行政がやりたいからって仕組みだけ導入したりとかっていうのもあるんですが、そうすると大概面白くない仕組みで、木も集まらないし、やっている人もなんかつまらなそうで、間伐補助金と同じような状況になってしまいます。やっぱり行政は一人なんだけど、あくまで黒子役で住民の方がやってくださるのを待っているという立場がいいんじゃないかなと思います。これでお酒を飲むという。

最近、田口さんの話でもあったまきポイラーがはやりみたいに言われてまして、チップより原木は高く買えます。その取り組みを、上石津でやっています。上石津も加子母と同じで温泉スタンドがありまして、合併前に温泉を掘りました。それから大垣市。地元の方は研究会とかいろいろイベントを集めてPRをかなりやってまして、六〇〇人とか七〇〇

人ぐらい集めたイベントもあったんですが、それでも市役所はすごく遠くなってしまっただけで、「やらないぞ」と言われてしまったので、じゃあ自分たちでやろうということになり始めました。これ地元の大工さんが浴槽を作っておじさんが入っています。実はこんな感じで意外にいいですよ。一応男女あるんですよ。週に水曜日と土曜日しかやっていませんが、期間限定でやっていますので、来年の三月までやっておりますのでぜひお越しください。大体二〇人、三〇人ぐらいが風呂に毎日入る。これ実は、なんでこういうふうに張ってあるのか分かります？ 実は穴が開いているから埋めてあるんです。女子風呂の所だけ。これやばい。まきポイラーも入っています。

三輪千加子さんという番頭をずっとやっているおばちゃんです。木の駅でも事務局をやっています。商店との換金だったりとかをやっているおばちゃんです。最近このおばちゃんが面白いことを始めました。このおばちゃん実は、まきポイラー世界ではかなり有名な人です。高卒のマドンナというあだ名が付いている。なぜ高卒のマドンナかというのと、まきポイラーを初め入れることで、自分が番頭をやるということになり、そのときに、私にできるか



写真4 まきポイラーにまきをくべる番頭さん

しらってとつても不安だったんですよ。そしたら、やってみると意外にこのポイラー使うの簡単だったんです。そうすると、初めは大丈夫かなって下向いてたのが背筋が伸びてまいりました。「私は高卒なのに、高卒の私にも使えます」と言うんです。でもまきポイラー使えるか使えないかっていうのは、高卒かどうかっていうこととは関係ないので、そう言っているの、みんなが高卒のマドンナっていうふうに言い始めて、最近では高卒のマドンナと呼ばれています。この人は実際は、事務の仕事しか今までやったことがないおばちゃんなんですけど、普通に使えるっていうのがいいんじゃないか、誰でも番頭さん一人で使える

のがいいわけです。

(写真4)

もう一人、温泉をやってスターみたいになってる人が居まして、川添幸男さんというおじさんです。この人、木の駅の土場でストーブ用のまきを作っていて、まきを割ってるんです。この人は、まき割り機っていう機械があるんですけど、かたくなにまき割り機を使わない人でして、俺は斧で割ったほうが早いって言うてるんですね。みんながまき割り機でやっているのに一人でこういうふうにやっているんですけど、実際早いですよ。この人他の所でもまきを作っていて、これはすごいなと。上石津の中では唯一架線の集材機の免許を持っている達人でもあります。いろんな人がここを見に来る。そうするとこの人は、居るときはいろいろ話をしてくれるんですけど、そのときにうれしかったことが最近あって、「森君、森君」で。僕は大体付いていくので、「森君、森君」と言うんですよ。そうしたときに、この人が「俺は木の駅をやり始めてすごく世間が広まったような気がするよ」というふうに言ってくれたんです。で、自分たちが持っている技術は、自分たちを食わせていくことはできるけど、みんなに注目してもらえようなものじゃないと

思っていたらしいんですね。いろんな人が来て、いろんな人に話し掛けられて、この人もまきを作り始めるようになって元気になりました。

(写真5)



写真5 まきを割る川添幸男さん

実はまきボイラーも、これヨーロッパから、さっきのオーストリアから買ったボイラーですけど、自分たちで据え付けたんですよ。これが村の木工さんで、木の駅の実行委員長と、水道屋さん、木の駅のメンバーの電気屋さんが居るので、その四人で大体据え付けをしました。メーカーはすごく難しいんだとか、東京のメーカーが言ったりするんですけど、別に大して難しくはなくて、普通に電気屋さんとか木工さんできちゃおうというのが実証できま

した。

(写真6)



写真6 まきボイラーの施工の様子

まきボイラーと木の駅に関してわれわれがやっていることは、ただ単に経済的に回るとかじゃなくて、やっぱりそこに住んでいる人たちが手を動かしてやることで、地域に住んでいる人たちが生き生きしてくる点がとてもいいと思っています。そんな村で、木の駅の先にあるものだと思ってる村がありまして、最後にそれを簡単にご説明して終わりたいと思います。

ドイツの南にバイエルンという州があり、そこにレッテンバッハという小さい村がございます。この村結構面白い村でして、一番初めに僕が人口減少の話をしましたけど、これも

実は一九七〇年代に市町村合併をしました。バイエルン州が一〇〇〇人以上の村全部合併しようということに始めたので合併しなきゃいけないなって、隣村と合併したんです。そうすると、小学校がなくなって、役場がなくなると、幼稚園がなくなると、村の至るものがなくなっていくんです。そのときに、若い人たちがここに住んでも仕方がないなというのでどんどん抜けていった時期がありまして、七八〇人の人口が五八〇人まで減ってしまいました。

そこからなんかしなきゃいけないということ、フィッシャーさんという村長さんですけど、村長がまだ僕と同じ年ぐらいのときに仲間と立ち上がりまして、何を思ったのかよく分かりませんが、もう一回村として独立しようという運動を始めました。バイエルン州というのは大体一〇〇〇万人ぐらい居る州でして、この村は一〇〇〇人にも満たない村なのに、よくオーケーしたなと思いました。「どういうふうにオーケーさせたんですか」って聞いたたら、「州議会の議員ととにかく会わないといけないんだよ、森君」と教えてくれました。「どうやって会うんですか」と言ったら、大体州議会、トイレに行くか食堂に行くかして説得したり。なんやかんやで住民投票したり

とかして、もう一回会おうということになり、独立を八年ぐらい戦って果たしていくんですけど、そのときに、本当にこの人たちには自分たちで自治をやっているというのがうれしかったみたいで、最後は村の真ん中に噴水があるらしいんですけど、噴水にビールをためて大宴会したって。さすがドイツ、バイエルンだなと思いました。

そうして独立をします。その後、若者が住みやすく環境に優しい町というスローガンを掲げて、太陽光発電とかをやり始めます。一時期ドイツの中で一人当たりの発電量が多い村ということで、四年連続一番になったりとかしたんです。あとは木を燃やすボイラーです。たまたま立ち寄りしました。立ち寄る理由は、このまきボイラーに、住民の方がまきを持ってきて、ボイラーは村営のスーパの下にあるんですけど、地域通貨で支払う仕組みをやっています。なので木の駅と同じことをやっているんだなということで見に行ったわけです。なんかいろんなことやっています、自分たちのことは自分たちでやるということが一番大事だって、村長は言っていました。スーパも自分たちで作りましたし、農産品とかも自分たちのスーパで売っています。林業用の機械を

作っているメーカーがあるんですけど、これはすごいです。村の農家の息子がガレージで作っていたのがいいじゃないかとかいう話になって、村で盛り立てて一〇〇人から二〇〇人ぐらいの雇用があります。地域のお金を回すっていうので、初めはまきだけだったんですけど、それでうまく行ったので、肉製品とかはちみつとか全部地域通貨で買い取って村の中でいろいろと回しています。T P P、T P Pとか、最近あまり言われなくなりましたけど、この村では実は価格を自分たちで決めていきます。だからT P Pなんて全く恐れることはありません。勝手に自分たちで自分たちの経済回していますから。なんかそういうような経済があるのも強いのかと思います。こういうふうに開けてくると、村のスーパの横にあるカフェにも、みんな労働者の人が食いに来ます。人口が五八〇人から八三〇人上がったという奇跡が起きます。すごいと思いませんか。今過疎が進んでしまっているのに、そういうところでも一回頑張るためのなんか希望になると思っています。

(図4)

なので、木の駅では終わらせずに、やっぱりこういうような世界を目指していかないといけないんじゃない

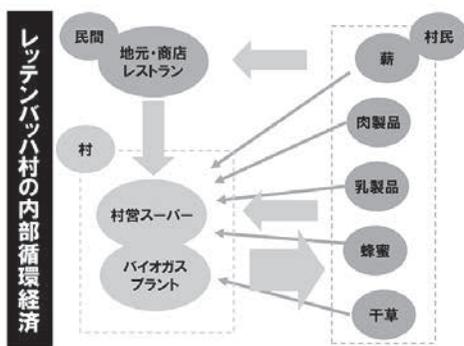


図4 地域通貨による地域循環

かなと思っていろんな所でやって
おります。上石津でもこういうふう
に思っています。ちようど時間
が来ましたのでこのぐらいで終わ
ります。どうもありがとうございます。